

2025 年 10 月 26 日 降誕前節 第 9 主日礼拝

メッセージ「平和に生きる 孤独よりつながり」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 10 章 2-12 節

コリントの信徒への手紙 I 7 章 10-15 節

先週、10 月 21 日に日本の憲政史上初めて、女性の内閣総理大臣が就任しました。高市早苗さんです。自民党の総裁選以前から、ずっと過激な発言を繰り返していましたし、26 年間もの長きにわたって連立していた公明党との連立解消などもあり、まさかこのような結果になるとは私も思っていませんでした。彼女が首相になったことに対して、フェミニストたちからは「女性が首相になってほしい」と言っていたが、それは高市さんではない」という声が上げられたり、またそれに対する批判として「フェミニストたちは『首相を女性にしろ』と言っていたのに、実際に女性が首相になったら、『彼女は違う』と言い、主張に一貫性がなく、支離滅裂だ」という声も上げられたりしています。

外国のニュースでは、「高市氏は日本で最初の女性総理大臣だが、彼女はフェミニストではない」と報じられていましたが、その通りで総理大臣の性別が男性か女性か、ということが大事なのではなく、その中身、どのような方向の政治を目指しているかが大事なのだと思います。とはいえ、そういう私自身が一人の「おっさん」ですから、「『おっさん』が『女性』の中身について、とやかく言うな。それ自体が男性中心主義的な思考だ」と言われると、返す言葉がありません。

日本の今年の「ジェンダーギャップ指数」(世界経済フォーラム)は 148 カ国中 118 位で、とりわけ政治と経済の分野において非常に低くなっています。フェミニストたちが総理大臣や閣僚に「女性」が増えてほしいと願って来たのは、「女性」たちが、長く差別され、抑圧されて来た経験を持っているからであり、そのような足を踏まれ続けてきた痛みを知っている側として、そのような痛みを経験している人々たちを減らすために、再生産しないために尽力してほしいと願っているからです。

それにもかかわらず、実際には人の足を踏みつける人たちしか、人の上に立つことが出来ていないのが日本の現状です。もちろん「ビジネスエセ保守」と揶揄されている高市さんですから、本心は分かりません。「おっさん」しかいないような政治の世界で、頂点まで上り詰めるためには、あれを捨て、これを諦め、無理矢理にでも我慢して、認めたり受け入れたり、様々なことをして来た末の今なのでしょう。今後、彼女の舵取りで日本の政治がどのようになっていくのかは分かりませんが、

踏みつけられている側の人たちがいるということ、その声が少しでも為政者たちの世界に届いてほしいと願うばかりです。

人は、その立っている所からしか世界を見ることができません。言葉を換えれば「その立つところによって見える物が異なる」ということです。そしてそれは聖書の読み方についても同様です。「聖書は『神の言葉』だから、一言一句、一文字一文字が正しくて、誤りがない」と言って、聖書に基づいて人を差別し断罪する人たちがいますが、それは誤った理解です。聖書も人間が書いて来た書物ですから、書き間違いもあれば、読み間違いもあり、もちろん翻訳の間違いもたくさんあります。だからこそ、私たちは 2000 年前にこの地上に、歴史の中に生きられたイエス様が、どのように誰と共に歩まれたか、その生き様にこそ注目します。出来事となった神の言葉（ロゴス＜ダーバール＞）であるイエス・キリストの言葉と振る舞いを通して、聖書を理解しなければ、単なる妄信、誤解になってしまいます。

今回の聖書は、「結婚」と「離婚」について書かれているイエス様の言葉と、パウロの言葉と 2 つの箇所でした。一つ目の「マルコによる福音書」の方は、いわゆる「離婚の禁止」として、どこかで聞いたことがあるかもしれません。キリスト教の結婚式の中では、しばしばこの言葉が引用されて、「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」（9）と宣言されることが少なくありません。ですが、本当にそうなのでしょうか。イエス様がこのように答えられた場面は、イエス様のことを良く思っていないファリサイ派の人たちが、イエス様のことを試そう、陥れようとして、何とか失言の言質をとろうとして質問してきた場面でした。

「夫が妻を離縁することは許されているでしょうか」（2）、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」（4）。確かに「律法」には「ある人が妻をめとり、夫になったものの、彼女に何か恥ずべきことを見だし、気に入らなくなったときは、彼女に離縁状を書いて渡し、家を去らせることができる」（申命記 24:1）と書いてあります。では「いつでも何でも夫は妻を離縁し放題」かということ、もちろんそんなことはありません。そもそも離縁するために結婚するわけではありませんし、一人の人ともう一人の人との結婚や離婚というものを、一般化して論じることなんて決して出来ないわけです。だからこそ、イエス様は彼らに対してこのように「創世記」の「天地創造」の話を引用されて（マルコ 10:7-9）、「天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった」（創世記 1:27）、「人は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる」（創世記 2:24）と言われたのだと思います。

しかし、ではイエス様の発言の字面通りに「離婚は絶対にあってはならない、許

されないことだったのか」というと、そうでもありませんでした。そもそも離婚というものが、古代の社会の中でも実際に存在していたからこそ「律法」にも定められていたのであり、またファリサイ派の人たちからの質問もあったわけです。お互いに異なった人格を持った人と人とは共に暮らすわけですから、当然のこと、考えも異なれば、「合う・合わない」の相性もあります。血を分けた親子であっても合わないことは珍しくありませんし、「親子だからこそ合わないこと」もあるでしょう。ましてや夫婦であればなおさらではないでしょうか。

だったら、「いつでも離婚していいのか」と言うともちろんそんなことはありません。現代の日本でもそうですが、古代イスラエル社会では女性が圧倒的に不利な状況におかれている社会的弱者でした。結婚によって父の所有物から夫の所有物になるというのが女性であり、死別であれ他の理由であれ、夫と別れて寡婦となると誰からも保護を受けられない存在になってしまいました。女性が主体性や権利を認められていない存在だったからこそ、そのような女性を好き勝手に放り出すようなことは決して許されてはならない、とイエス様はファリサイ派の人たちに対して戒められたというわけです。

パウロが「コリントの信徒への手紙」の中で記していることも同様です。10 節と 11 節は、聖書協会共同訳では「妻は、夫と別れてはいけません」「夫は妻を離縁してはいけません」と、どちらも対等に離婚の権利を持つ関係であるかのように翻訳されていますが、当時の社会では離婚の権利を持つのは男性のみでした。ですから、本田哲郎先生の翻訳では分かりやすく「妻が夫から離婚させられることがあってはなりません」と区別されて翻訳されています。これも女性の生活保障、権利擁護の観点からの言葉でした。

パウロはさらに 15 節では「もし、神に信頼して歩もうとしない相手が、自分から別れていくのなら、別れていかせなさい。男であれ女であれ仲間のほうは、もはやその人たちに従属することはありません」とも述べています。この翻訳は聖書協会共同訳でも同様です。つまり、パウロの時代にも、社会の中には離婚の実態がたくさんあった。そして「それでもいいのだ」というわけです。なぜなら「神があなたたちを呼び合わせたのは、あなたたちが平和に暮らせるようになるため」だったからです。つまりどちらか一方の生活や権利が侵害されたりすることがなければ、「お互いにどうしても平和に暮らせないのであれば、お互いを大切にするために、離婚してもいい」ということです。

ですから、「神が定めたから別れてはならない」と思い込んだり、「祝福されて結

婚したから、離婚したら呪われる」と怯えたりする必要はありません。神様はご自分が創られた全ての命が大切にされて、生き活きと生きられることを望んでおられますから、夫婦といえども、親子、家族といえども、一方が他方を踏みつけたり抑圧したりして、息苦しくさせられている状態を、決して良しとはされません。そもそも、神様が人間を創られた時、その当初から人は一人ではありませんでした。「招きの詞」でも読みましたが、「神である主は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう』」（創世記 2:18）です。この「ふさわしい助け手」とは、どちらかが上で、どちらかが下というのではなく、ヘブライ語の元々の意味は「向かい合う同伴者」（山口里子『虹は私たちの間に』）や、「向かい合って立つ協力者、共同責任者」（本田哲郎「旧約聖書における『家庭』」「教会は『家庭』をどう見てきたか」）というものであり、双方の対等性が述べられていました。

また「男と女に創造された」（創世記 1:27）という表現も、現代科学の表現を用いた場合の「ヒトの染色体を XX と XY の 2 種類のみで創造された」という意味ではなく、「A と A'」として「似ているけれども互いに違う者、同時に共に助け合い補い合う者」として造られたと理解すべきです。そうでなければ、多様な性のあり方の現実、性の多様性や、染色体の多様性が否定されてしまいます。神様が創られて、私たちが命を与えられて今も生かされているこの多様性に満ちた現実という出来事から出発して聖書を読み、理解していくのであって、その反対ではあってはならないわけです。文字で書かれたテキストとしての聖書に現実を無理やり当てはめていくと、その枠内に収まりきれないものがたくさんこぼれ落ちていきますし、断罪されていくものがたくさん生じます。歴史の中を生きられたイエス様や、古代の預言者たちが厳しく糾弾したのは、そのような死んだ文字に拘泥するあまりに、生きた人を人として大切にしない律法主義に他なりませんでした。

神様によって命を与えられた私たちは、平和に生きようと召し出されています。そのためには一人では生きられません。「人が独りでいるのはよくない」（創世記 2:18）。私たちの周りにはその時々、共に生きる仲間、家族や、また家族とも呼べる友たちがいます。孤独に生きるのではなく、つながりを結び合って、それぞれの中に生かされていく。そのようにして、私たちは今日もこの世界に平和を創っていくために、導かれていきます。